

風土と風景概念に関する地理学的アプローチ

大 嶽 幸 彦*

(平成3年10月22日受理)

要 旨

本稿は風土と風景概念に関する地理学的考察である。筆者は、和辻哲郎、森 有正、オギュスタン・ベルク、イーファー・ツウアン、フランソワ・ダゴニエの著作を主に検討した。風景を地理学的に吟味するにあたり、三つの行為が必要であることを指摘した。すなわち、対象をよく見ること、見ている対象について熟考すること、そして叙述する方法を伝えることである。

KEY WORDS

Fūdo

風土

Landscape 風景

Geographical Approach 地理学的アプローチ

1 は じ め に

筆者は既に、ヨーロッパの風土と日本人を例として風土と人間への地理学的アプローチを試み、小論をまとめたことがある¹⁾。その論稿では風土と人間との関係を論じたが、人間に関する考察が主体であり、風土に関する考察は十分ではいえなかった。また、風景に関しては、地理学における風景概念についての考察を試みたこともあった²⁾。客観的色合いの濃い景観という地理学独自ではあるが、使い古された用語ではなく、人間をもその中に取り込む風景という用語を中心に、議論を展開したのである。そこで、本稿は両者を基に風土に関する考察を更に深め、かつ風景概念についての考察を発展させる方向で、風土と風景概念の関係・連関を取りまとめてみたものである。

次に、本稿に関連する最近の先行研究について若干の概観を試みておきたい。まず、阿部 一は現象学的景観研究を志す中で、景観の変化と主体の変化をスパイラルに図示すると共に、物語 (Story) という概念を使って主体と景観の通時的な関係を説明している³⁾。山野正彦はシュリューター、バンゼ、グラートマン、フォルツ、グラネラの1920・30年代ドイツにおける景観論を、景観の相貌 (physiognomie) とゲシュタルトの観点から分析し、次のように述べている。すなわち、「新地理学の主張は、没価値的な客観主義・実証主義批判、概念より生き生きとした具体的現象の強調、動態的な景観像の把握、知識像など主体からみた景観への関心、全感覚器官による空間の知覚、美学理論の適用、意味関連としての景観の体験による理解など、今日からみて注目に値する内容を含んでいた⁴⁾」としつつも、ナチスの興隆時代に重なって展開した擬科学的主張は、その表裏一体の相手であった地政学と人種理論の罪業ゆえもあって消えていっ

* 社会系教育講座

たとしている。石井 實は地理写真集『地と図——地理の風景』の中で、青山界隈を最後に取り上げているが、その界隈（カルチエ）こそ、著者が長年職場として通いつめ、風景を見続けてきた著者の生きられる空間 *espace vécu* であった⁵⁾。本稿で言う風土とは「自然環境と同じような内容を持ち、地形・気候・地質などをさすが、それが主観的に体験されたものとしての自然環境であり、客観的存在としてのものではない(最新地理学辞典, 新訂版, 1979年, 大明堂)」と定義しておく。つまり、風土という概念は、ある意味で人間生活と、それとかかわりまたはかかわらぬ客観的存在としての自然とを、一体化した未分化にあるものとみる考えかた⁶⁾に従うわけである。

和辻哲郎の著した『風土』は、風土を考える際にはよく言及される書物なので、和辻の『風土』をめぐるさまざまな論義の周辺から本稿を進めることにしたい。

2 和辻の『風土』をめぐる

和辻哲郎の『風土』は昭和10年の出版以来、半世紀を経過したことになるが、おおむね批判されることが多かったように思われる。小林 茂は論稿「風土論と地理学」の中で、和辻の『風土』に関する地理学者のさまざまな批判を論評し、次のように述べている。すなわち、「風土論のもうひとつの特徴は、その説明からくだされる判断自体が人間生活に直接重大な影響をおよぼすようなことがらについては、それはほとんど語ることではない⁷⁾」と。筆者は『風土』に見られる記述内容の誤りにもかかわらず、風土を人間の自己了解の仕方としてとらえた和辻の観点のユニークさを評価し、論を展開したことがある。すなわち、和辻の語るところによれば、「風土は主体的には人間存在の契機として働いている。そうして人間存在のさまざまな契機がある時期に著しく発展し他の時期には下積みとなっているように、風土的契機もまた時には著しく働く⁸⁾」と、風土と人間との結びつきをとらえている。また、別の箇所では、和辻は次のように指摘している。「我々は、音楽家を通じて音楽を己れのものとし、運動家を通じて競技を体験し得るように、理性を光の最もよく輝くところから己れの理性の開発を学び、感情的洗練の最もよく実現せられるところから己れの感情の洗練を習うべきではなかろうか。風土の限定が諸国民をしてそれぞれに異なった方面に長所を持たしめたとすれば、ちょうどその点において我々はまた己れの短所を自覚せしめられ、互いに相学び得るに至るのである。またかくすることによって我々は風土的限定を超えて己れを育てて行くこともできるのであろう⁹⁾」。中村和郎も「風土が人間の自己了解の仕方であり、主体的な人間存在が己れを客体化する契機であるとするような見解は、欧米には極く最近まで現われてこなかった¹⁰⁾」と述べ、和辻の先見性を評価している。

オギュスタン・ベルクは和辻の『風土』について徹底的に分析したフランス地理学者である。ベルクは著書『風土の日本』の中で、風景についても言及し、次のように述べている。「地理学では景観が特権的な研究対象のひとつとなったのであった。場合によっては研究対象の筆頭にあがることもある。しかし地理学者の多くは、そうしながらも風景を実体化し、風景がある風土において関係としてしか存在しないことを忘れてしまった¹¹⁾」と。ここには、ベルクが風土と風景に関する結びつきの一端について考察したことがうかがえる。既に、筆者は景観概念と風景概念を区別して使用したが¹²⁾、中村和郎もマックス・ソールの言葉を受けて形態、色彩、音、匂いなど具体的なあらゆる属性をもった相観の複合体こそ、感覚的にとらえられる景観として

いる¹³⁾。

先にも述べたように、和辻著『風土』への批判は数多いが、ここでは内田芳明の最近の批判をその1つの例証として挙げておこう。

「かつて和辻哲郎は、人間と文化の風土的規定性のことを、文化の風土的構造として語った。だが人間と自然と歴史(文化)の風土的構造を提言する風土学的方法では、「人間のための自然」という立場の限界を照らし出すことはできない。和辻風土学では、人間をとり囲む自然＝風土環境が地域によって違っていることが……中略……歴史的・文化的生の様式の相違をいかに規定しているか、ということが追求されている。だがそれは結局のところ、人間が自然をいかに利用・征服・適応・順応してきたか、という論理にほかならない¹⁴⁾」と述べている。和辻自身は、風土の現象について最もしばしば行なわれている誤解は、我々が最初に提示したとき常識的な立場、すなわち自然環境と人間との間に影響を考える立場であるとして否定しているものの、いわゆる人文地理的発想が『風土』の根底にはひそんでいるのである。

次に、デカルトやパスカルの哲学研究をしながらも、みずから思索を深めていった森 有正の著作を例にして、風土と風景に関し、別の視角から考察してみよう。本稿で取り上げるのが、中でも地理的部分に限られる点は言うまでもなからう。

3 森 有正の『バビロンの流れのほとりにて』をめぐって

森 有正著『バビロンの流れのほとりにて』には、旅をしながら、風土や風景について考察した箇所が数多くある。けだし、机上の空論では、風土や風景の核心は把握できないし、旅をすることで現実につきあたり、考えを修正するようせまられるからである。次に、それらのうちのいくつかを取出してみよう。

自然と人間というテーマは哲学でも地理学でも大きな研究テーマの一つであり、容易には論じえないが、森 有正が次のように述べている箇所がある。

「暗い地中海、冷い白い光のひたす地中海はそのままに美しい。明るい輝く日の光は、もう僕にはすぎ去ったとりかえしのつかない過去の虚像だ。自然と人間というテーマは古来から重要なものとされているが、一箇の人間と自然とが、正しく照応する様になるには、本当にその人の全生涯が必要なのかも知れない¹⁵⁾」。地中海の紺碧の空とは対照的に、フランス北部の空は晴天でもどこか白味がかっている。両者の違いについて、森 有正は次のように指摘している。「一番顕著なのは、パリを中心とした、あのイール・ド・フランスの上に広がる半調の空の色であろう。この半調の空間はすべて生の色を消し、一種の間接的な、和められた美しさを生み出している。最も対立する色も、この作用をうけて、調和に入る。何も、霧が立ち罩めているわけではない。透明な中にしみ通っているこの半調性は、フランスの自然の性格であろう。それは、その中に住む人間にも、影響を及ぼさないではない。それは一つの文明の母胎をなす基調だと思う。絵画にも彫刻にも、音楽にも、また文学にも、それが表われている¹⁶⁾。」

地理学的著作の中に、写真やデッサンを使うことはよくあることであるが、風景のデッサンの中に、森 有正が描き手の人間性を把握している点は、次の箇所に見られる。

「エリゼ・ルクリュエの『世界地理』の第6巻《Asie Russe》の中に、アラル海やバルハシ湖近辺の荒涼たる風景のデッサンが入っている。この荒々しい自然の中に、何か一種の人間の

香りが漂って人の心を引くのはなぜだろうか¹⁷⁾。風景の中に、人間の営為を読み取ること、これは一つの眼識といえよう。視覚に入る物だけを景観として研究対象にし勝ちであった地理学にとって、目に見えぬ物を研究対象として引き出し、その因果関係を明らかにすることも必要と思われる。

4 その他の著作をめぐる

ここでは、ベルク、トゥアン、ダゴニエの著作を基に、風景と風土に関する考察についていくつか取り出してみたい。

まず、オギュスタン・ベルクは次のように述べる。「風景は風土と同様、相対的な実体なのである。風景は、どれほど間接的にであれ、視線を放つ主体の本性を常に反映する。この場合の主体は、個別的でもあれば、集団的でもある¹⁸⁾。」風景と風土との違いをある意味で述べているといえよう。別の箇所では、ベルクは次のように言う。「日本人であれば、どこにしようとも、アメリカ人やホッテントット人とは別なやり方で風景を見、風土を評価することになるのである¹⁹⁾。」言葉を換えて言えば、日常ちまちました風景に慣れた日本人にとって、大きなスケールの風景を目の前にしても、ただただ呆然とするばかりであろう。また、次のようにもベルクは述べる。「風景は生成であり、他方では複製である。この2つの側面はかたく結びついていて、生成は決して完全にオリジナルなものではないし、複製は完全に忠実なものにはならない。そしてまさしくこの事実からこそ、風景は意味を付与される²⁰⁾。」風景が必ずしも実物通りには再現されない点に関しては、後に言及したい。ベルクは新しい概念として、通態 *trajet*、通態的 *trajectif*、通態化 *trajection* 等の用語を提出しているが、筆者は今のところ、それらの概念をよく把握できてはいない。

次に、Yi-Fu Tuan (トゥアン) 著『空間の経験』の中から、二、三、取り上げてみよう。

「われわれは、外を見るときには現在か未来を見ている。それに対して、内を見るときには……中略……、過去を追憶することがよくある。内陸、すなわち他から隔絶された風景は、ワーズワスにとっては、太古の霧のなかから立ち上がってくる自然の時間のイメージと、過去の記憶をもつ人間の時間のイメージの両方を意味していた²¹⁾。」人が過去へ意識が向かう時は内省的気分になっている時であり、意識下にある風景が突如として現前することになる。中国系合衆国人であるトゥアンにとって、自然と人間のテーマは山水画の世界、霧に包まれた山と湖から成る広大な、原始のような世界なのである²²⁾。別の角度から言うと、風景は空から垂直的に眺められるか、斜めに見られることもあるが、それによって見える物が全く異なることがある。「子供にとっても大人にとっても、飛行機上の操縦士から風景はどのように見えるだろうかと想像する方が、丘の向こう側にいる農夫から風景はどのように見えるだろうかと想像するよりも容易なのである²³⁾。」したがって、地理学が研究対象とする自分の住んでいる生活空間の外側にある世界、すなわち山の向こうの生活空間を教え、想像させることには、相当の困難が待ち構えているのである。

次に取り上げるフランソワ・ダゴニエは地理学者ではないが、著書『具象空間の認識論』の中で、地理学や風景について言及している箇所があるので、二、三取り上げてみよう。

ガストン・ルブネルの著作を例に、ダゴニエは次のように述べる。「彼 (ルブネル、筆者注)

は現在の様子に隠された源初の敷地、昔の道、失われた境界線、覆われた輪郭、消し去られた跡などをしっかりと描出したので、彼の地理学はまさに『フランスの田舎の歴史』〔彼の主著の題名〕となった。我々の眼前で、＜風景＞は多様性を収斂させ、層状化していく²⁴⁾。」

以上の記述は風景の中に織り込まれた歴史的累層性を示していよう。また、別の箇所ではダゴニエは次のように言う。「風景は何よりも汲み尽し難い科学的問題である。それは画家や小説家にとっては文化的なくタブロー、〔魂の状態〕であり、単なる枠組ではなく自己の内で戯れ、闘い、敵対性をさらに際立たせる複雑な妥協態である。しかしまた、＜風景＞は我々にとって一つの＜方法＞でもある。我々はその内部によりも、それを介しての方が、より多くの物を見出せる²⁵⁾。」風景が小説の作品の中でよく取り上げられる点に関しては、既に拙稿で検討したことがあるので、ここでは再度触れることはしない²⁶⁾。ダゴニエは、ルブネルの著作について、また次のようにも述べている。

「第一我々は、昔の風景の中に、それを安定化し調和を与えるもの、自然的諸力と人間的エネルギーの二重の動力学を見分けられる。そこから、場所と、その極めて緩慢な変貌を巡る具体的科学とが生じる。我々はルブネルのことを念頭に置いている。ともかく我々はもはや、地理学を＜世界＞の一瞬や一画像の讃美には閉じこめておけない²⁷⁾。」そして、「場所や風景を情感的に盛り上げる地理学や、それを単に平板に描出する観察家・旅行者の退屈なモノグラフィの地理学ではなく、＜実験的で系列的なネオ・地理学＞の誕生に光をあてていこう²⁸⁾。」と、環境を視点とした新しい地理学に大いに期待しているのである。

5 お わ り に

本稿は、和辻哲郎の『風土』を初めとして、いくつかの著作を基に、風土と風景概念に関して地理学からのアプローチを試みてきた。和辻の述べる如く、風土の現象は文芸、美術、宗教、風習等あらゆる人間生活の表現のうちに見いだすことができる²⁹⁾ゆえ、最後に、この問題を取り上げておきたい。

我われ地理学者は職業柄、よく風景写真を撮るが、撮ったこと自体で安心してしまい、実際の風景そのものをじっくりと観察していないことが間々ある。また、グラビア、Postcardの風景写真や、絵画などで写實的に描かれた様々な風景は、それらを熟視し思索をめぐらすことで研究の素材となったり、少なくとも地理学的素養の訓練になりえるのである。ウォルフは1900年頃のパリ・オペラ座のPostcardを引き合いに出しながら、第二帝政時代のシンボルであったオペラ座を中心に文化政策を論じている³⁰⁾。筆者は、オランダのハーグにあるMaurithuis美術館でのVermeerの《デルフトからの風景》や、農民を描いたVan Ostadeの絵画を、ミシェラン社発行のガイドブック(Guides verts)片手に見て廻ったことがある。しかし、美術に関して筆者は門外漢であり、絵画を見た後の印象を1970年当時全く記録に残していないのは、今となっては残念である。また、映像の世界での、各地の風景も注意して見ておれば、地理学への訓練が日常的に可能である。ただ、映像は撮影する者の主観が入り勝ちであり、客観的存在としての風土とは区別されなければならない。

風景といえば、風景画家の描いた風景画も大いに参考になる。しかし、彼らは風景画の中に自己の心ないし思索を投影し、いわば彼らの心象風景を描き出しているといえよう。というの

も、画家は現地で風景とあい対しても、スケッチないし簡単な下絵にとどめ、本格的な制作は長時間をかけて室内のアトリエで行われることが多いゆえ、実際の風景とは異なることがあるからである。実際の風景を吟味するには、密接に関連する三つの行為が必要である。すなわち、見ること、見ている対象について考えること、そして叙述すること³¹⁾である。E.Relph にならって言えば、見ることは理解すること、洞察力と同意語となりうるのである。画家が一方で優れた絵画を制作しながら、他方で含蓄にあふれた文章を数多く残しているのも、よく見ること、考えることを実行しているからに他ならない。19世紀の画家、ラスキンがその典型的な例である。地理学にとっても、想像し、思索する方法を伝えることは重要な仕事のひとつとなろう。ピーター・グールドにならって言えば、「私達は現在の仕事にあまりにも捕われ過ぎているために、少し距離をとって全体を眺め、これから進んで行く方向を注意深く見定めることがなかなかできないでいる³²⁾。」本稿は、風土と風景に関し、筆者の現時点での考察をまとめてみたものであり、今後もこのテーマについて考えを深めてゆきたい。

注

- 1) 大嶽幸彦「風土と人間への地理学的アプローチ—ヨーロッパの風土と日本人を例として—」神戸大学教養部紀要「論集」26号, 1980, pp.35~46
- 2) 大嶽幸彦「地理学における風景概念についての一考察」上越教育大学研究紀要, 第8巻, 第2分冊, 1989, pp.99~108
- 3) 阿部 一「景観・場所・物語—現象学的景観研究に向けての試論—」地理学評論, 第63巻, 第7号, 1990, pp.453~465
- 4) 山野正彦「景観の相貌とゲシュタルト」人文地理, 42巻2号, 1990, p.166
- 5) 石井 實『地と図, 地理の風景』朝倉書店, 1989, 177p.
- 6) 千葉徳爾・榎山政子『風土論・生気候』朝倉書店, 1979, p.16
- 7) 小林 茂「風土論と地理学」経済地理学年報, 第23巻, 第2号, 1977, p.41
- 8) 和辻哲郎『風土, 人間学的考察』岩波書店, 1935, p.81
- 9) 前掲8)p.119
- 10) 中村和郎「地理学と風土」人類科学, 34, 日本の風土, 1981, p.41
- 11) オギュスタン・ベルク著・篠田勝英訳『風土の日本』筑摩書房, 1988, p.172
 安田喜憲は、ベルクのこの著作を紹介しつつ、人間中心、理性中心の論証主義、科学至上主義には明白な限界があることに、ベルクは気づいていないと批判する。
 安田喜憲「日本文化風土論の地平」国際日本文化研究センター紀要「日本研究」第2集, 平成2年, p.200
- 12) 前掲2)の論文
- 13) 前掲10)p.36
- 14) 内田芳明『風景と都市の美学』朝日新聞社, 1987, p.256
- 15) 森 有正『バビロンの流れのほとりにて』筑摩書房, 1968, p.19
 和辻哲郎は地中海を見た時の印象を次のように記している。
 「自分の直接に触れたところによると、この海は、三月にも、五月にも、また十二月にも、我々が平生海と思っているものと同じでなかった。それは漠然たる印象に過ぎぬが、しかし

自分にとってはかなり強く感ぜられたのである。……中略……ニースやモナコあたりの海岸通りが見渡す限りコンクリートで立派に固めてあるから、それで感じが違ったのだとは思われない。この道に添った波打ちぎわの白い美しい砂が、今掃き清められたように一点の塵埃さえも交じえないで、長くはるかの彼方まで続いている、その砂の具合がどうも我々には砂らしく感ぜられるのである。」前掲8) pp.66～67

- 16) 前掲15)p.118
- 17) 前掲15)p.320
- 18) 前掲11)p.168
- 19) 前掲11)p.175
- 20) 前掲11)p.174
- 21) イーファー・トゥアン著・山本 浩訳『空間の経験』筑摩書房, 1988, p.197
- 22) 前掲21)p.89
- 23) 前掲21)p.42
- 24) フランソワ・ダゴニエ著・金森 修訳『具象空間の認識論』法政大学出版局, 1987, p.134
- 25) 前掲24)p.137
- 26) 前掲2)の論文
- 27) 前掲24)p.251
- 28) 前掲24)p.144
- 29) 前掲8)p.13
- 30) Penelope Woolf 「Symbol of the Second Empire: cultural politics and the Paris Opera House」 D.Cosgrove et al. ed. 『The iconography of landscape』 Cambridge Univ. Press, 1988, pp.214～235
- 31) Edward Relph 「Responsive methods, geographical imagination and the study of landscapes」 Audrey Kobayashi et al. ed. 『Remaking human geography』 Unwin Hyman, 1989, p.152
- 32) 前掲31)p.158
- 33) ピーター・グールド著・杉浦章介・二神真美共訳『現代地理学のフロンティア (上)』地人書房, 1989年, p.59

A Geographical Approach on the Concepts of Fūdo and Landscape

Yukihiko OHDAKE*

ABSTRACT

The object of this research is to consider geographically the concepts of Fūdo and Landscape. The author has principally analysed the publications of Tetsuro WATSUJI, Arimasa MORI, Augustin BERQUE, Yi-Fu Tuan and François DAGOGNET. He remarked the necessity of three activities to analyse the landscapes; to see impartially the object, to think thoroughly the object itself and to tell the method of description.

* Division of Social Studies



JOHANNES VERMEER (1632-1675)

Gezigt op Delft / View of Delft / Ansicht der Stadt Delft / Panorama sobre Delft. (Postcard)